

## 第13回「公德文芸賞」の入賞作決まる

熊本地震をテーマにした作品も

高校生を対象にした第13回「公德文芸賞」（一般財団法人熊本公德会、熊日共催、県高等学校文化連盟後援）の入賞者が決まり、11月12日、熊本市中央区上通町の熊本公德会カルチャーセンターで表彰式がありました。

今回は俳句、短歌、自由詩、肥後狂句の4部門に過去最高の2882点の応募があり、審査の結果、部門ごとに最優秀賞一点のほか優秀賞、入選、努力賞が選ばれました。選者は短歌・塚本諄、橋元俊樹、俳句・岩岡中正、星永文夫、自由詩・丸山由美子、肥後狂句・野方正治の6氏。今回は4月の熊本地震をテーマにした作品が目立ち、入賞作24点のうち6点が地震関連の作品でした。

表彰式では、最優秀賞受賞者に盾と賞状、副賞の図書カード、優秀賞受賞者には賞状と副賞が贈られました。最優秀賞に輝いた生徒3人が自作を読み上げ、作品への思いなどを語った後、部門ごとに各高校の先生や審査員をまじえて意見交換をしました。生徒の指導に当たっている先生たちは「感性を磨く教育に力を入れている」「今しか作れないものを自由に書かせている」などと指導方針を披露しました。

最後に審査員が「高校生の笑顔から湧き出てくる作品を大切にしたい」「学校ではなく家に持ち帰って作ってほしい」などと講評しました。

受賞者名と、作品・選評（最優秀賞、優秀賞のみ）は次の通りです。

### 【俳句部門】

#### ▽最優秀賞

言霊の国が吐き出す春霞

信愛女学院3年 坂本 明日花

【評】わが国はことばにも精霊が宿るといふ、不可思議な力をただよわす国、その国が〈春霞〉を「吐き出す」といふ。浄と汚とがゆったりと溶け合ったような、〈春霞〉の景を言いえて妙。高校生の域を超えた作品である。（星永）

#### ▽優秀賞

やりたいこと十ほど書いて立夏かな

尚綱3年 倉本 光

【評】やりたいことをズバリと十ほど列挙して、率直。いかにも若者らしい。この意欲あふれる姿勢が、「立夏」という季語で十分に象徴されている。可能性と意欲あふれる青春に幸あれ。（岩岡）

少年は市電で夏を越えてゆく

信愛女学院3年 岡村 真由

【評】「市電」で、これは市内の通学のことだが、こう詠むと、不思議な旅情が湧いてくる。それも遙か人生の道のりの中の青春の日々にかかわる旅情である。市電で「夏を越える」としたところに飛躍があり、詩情がある。遙か少年の未来が見えるようだ。（岩岡）

炎天下ここが自分の戦う場

熊本工業1年 甲斐 梨華

【評】「炎天下」といきなり力強く印象鮮明に入り、一気に「ここが私の戦う場」と決意を述べる。元気で、いかにも若者らしい。若者の覚悟のようなもので、迫力がある。それも、「炎天下」という季語のなせるわざである。(岩岡)

祖母からの干し柿昨年よりも濃く

文徳1年 酒井 光

【評】「干柿」は祖母と作者をつなぐ絆。今年の干柿は昨年のもよりもっと濃いという。いよいよ祖母への思いもつのる。「干柿」というなつかしいものを通して家族愛や故郷への愛を詠んだ、心あたたまる句である。(岩岡)

夏の海マンガのような恋はない

球磨工業2年 永田 真由

【評】マンガ世代である。とは言え、世の中がそんなに甘くないこともちゃんとわかっている、覚めた世代でもある。「夏の海」にたくさんの夢があつて楽しいのだが、「恋はない」と断定した落差がうまい。夢と現実の往復が、若者らしいところ。(岩岡)

### ▽入選

岩下ゆま (尚綱3年) 鹿釜遼夏 (熊本工業1年) 甲斐歩 (矢部1年) 川崎彩花 (信愛女学院3年) 稲津栞 (尚綱3年)

### ▽努力賞

橋本苑佳 (尚綱3年) 大林悠人 (水前寺高等学園3年) 馬場優花 (尚綱2年) 緒方日生 (御船2年) 伊藤蓮理 (第二1年)

【総評】それこそ皆さんにはメールでも何でも表現や通信の手段はいっぱいありますが、俳句という手近な詩で、ことばと思いを磨いてみませんか。今回は、昨年より投句数も参加校もふえ、多彩で自由な俳句を拝見できて幸いでした。

最優秀賞の坂本さんの句には、大胆で幻想的な物語がありますし、と同時に知的です。最近は高校生でもことばが貧し子供っぽくなってきていますが、この句には知性があります。日頃、ことばへ関心や配慮を払っているからなのでしょう。こうしてことばの領域を広げていけば、あなたの世界がひろがります。それは、他の優秀句や入選句についても同様です。

皆さんは、名前は御存知の、正岡子規から高浜虚子が受け継いだものに、「自恃<sup>じじ</sup>」という精神があります。自分を恃<sup>た</sup>む、自分の頭で考え自分の足で立つということ、これこそ皆さんたちのようにこれからの人たちにふさわしい精神です。自由に大胆に自分の思いを表現することで、自立ししっかり歩んでいくことができます。俳句は、その自己表現の便利な方法です。これからもたくさんの高校生に参加してほしいと思っています。(岩岡)

俳句部門も一二七五点の応募があつて過去最高という。量的に確実に伸びているのは嬉しいかぎり。もちろん質的にもそれなりの向上は見られるが、指導の濃淡によるものか、学校差があつて、書きなぐりの作品もまだ多い。あと一押しのご指導をお願いしたい。

さて、詠まれている題材は、例年同様身近な蝉・花火・恋（今年はなぜかアモーレとある）が中心。部活や学習など、学校生活にかかわるものは減少気味。そして今夏最大の関心事であつた大地震についても、予想以上に少なかった。まして社会問題に触れるようなものはほとんどなく、ごく身近な、皮膚感覚のみで詠んだような、そんなものが多くて寂しかった。

その点入賞作には、ものを観る目の確かさや、自己を捉える工作に深みがあつて、句と向き合う姿勢に「真剣味」が籠もる。これらを参考にして、来年度もまた新たな挑戦のあらんことを、ただ祈るばかりである。（星永）

### 【短歌部門】

#### ▽最優秀賞

何もない解体された家の跡強く芽を出すさるすべりの花

第二1年 村上 夏穂

【評】地震によつて家が被災、やむなく解体された家屋の庭にさるすべりの木があつて、早くも花芽が吹いているという。自然現象の凄さと変わらぬ営みの対比を描写して実感がこもっている。素直で且つ深遠な歌である。（塚本）

#### ▽優秀賞

母の味今は普通の母の味十年後には最高の味

マリスト1年 西田 翼

【評】母の手料理を美味しく味わっているが十年後には「おふくろの味」として忘れられない味になると予言する。「母の味」のリフレーンも効果的。（橋元）

プレハブとブルーシートの続く道知らぬ顔して時走り去る

熊本3年 末岡 雪音

【評】地震に被災した街並みを「プレハブ」と「ブルーシート」でさりげなく表現した。結句の「知らぬ顔して時走り去る」が素晴らしい。地震のあつたことなどわすれたように経過してゆく時間の無常を歌っている。（橋元）

青色に輝く海は子のように夕暮れ染まる海は母かな

熊本高専1年 幸野 未紀菜

【評】昼と夕で色を変える海を見てできた歌。青い海が子供で、茜色の海を母親と感じた作者の感性に脱帽。結句の「海は母かな」は「朱の海は母」と色をいれたかった。（橋元）

西の空飛行機雲がのびていく今年も夏が終ってしまおう

熊本工業2年 久連松 加菜

【評】時間とは本質的には「連続する感覚」のことである。一見ありふれた日常の視野の一場面を切り取っている。上の句で実景を、下の句で思いの揺曳を表わし、胸さわぐ一瞬の思いを巧くうたいとめている。(塚本)

夏祭り君といた日を忘れない大きな花が咲いたあの夜

球磨工業2年 椎葉 奏

【評】夏祭りの夜の思い出を「大きな花が咲いたある夜」と捉え、リアルであるとともに、表現がユニークである。「大きな花」は花火のように煌めいたのかもしれない。その思い出をいつかまた思い出すだろうか。(塚本)

### ▽入選

安永治樹(マリスト1年) 川寄萌(済々黌3年) 岩根明加(菊池女子3年) 本田遥香(熊本西2年) 反頭陸(九州学院2年)

### ▽努力賞

松村侑里(尚綱2年) 守屋数人(城北2年) 西村拓磨(球磨工業2年) 上妻七海(県立盲学校3年) 杉本麗奈(玉名1年)

【総評】私どもは今年四月、大きな地震に二度も見舞われ、引き続き余震を幾度も体験した。このことは、いまだに根強く一人一人の心に巢食っているだろう。地震をうたった作品が多く寄せられたことは当然である。とともに、被災当事者としての思いには尊いものがあり、こののちにぜひ生かしてほしい。

一方、今日の高校生らしいみずみずしい作品があり、若さというものへの羨望とかつてわが身を省りみたことでもある。なかなか生きづらい世ではあるが、「純なる心」を忘れずにこれからを生きていってほしい。(塚本)

例年、入賞作品の三分の一(多いときには半分近く)程度二人の選者が同一作品を選んだのだが、今回は二人がダブって選んだのは一作品だけだった。このことは、作品のレベルが上がった証拠だと思われる。というか、作品のテーマが部活や宿題や友人などの学校生活中心だったものが、一般的な日常生活に広がったためで、地震を詠んだ震災詠もすくなくかった。最優秀作を含め、五作品が選ばれている。学校単位で応募される場合に、学校詠だけでなく、生活詠を読むような指導があれば、いいと思うのだが。(橋元)

### 【自由詩部門】

#### ▽最優秀賞

「いつも通りの朝」

ぱっと目を開く

一直線になった時計の針は

6と12を指している  
白くてまぶしいお米を頬張り  
体の芯から温まる味噌汁を吸って  
最後に冷えた牛乳を流し込む  
歯を磨いて口をすすぐ  
部屋着から制服に変わり  
靴下を履いて  
時計を付ける  
前日に整えた荷物を持って  
履き慣れた靴を履いて  
勢いよく外に出る  
いつも通りの朝  
ほんの少し違う毎日  
この見慣れた光景は  
もうそろそろ消えてしまうけど  
それでも時は止まらないから  
真っ直ぐ前を見て今日も歩く

球磨工業3年 出水田 雅人

【評】 高校三年生の登校までの時間を書いた几帳面な記録詩です。正しく、しみじみと。控え目な表題には、涙がこぼれそうです。卒業前の毎朝への、愛情と感謝と、惜別の情が、あらゆる動作の細かいところまできちんと書き上げていきます。美しい一篇です。

### ▽優秀賞

「荒土」

稲苗枯るる日来れども  
荒土に君は果つるなかれ

湧水涸るる日来れども  
荒土に君は果つるなかれ

蝉声囁るる日来れども  
荒土に君は果つるなかれ

畑中に立つ君  
畦道を行く君

日射が身を刺せど  
砂塵が喉を乱せど

荒土に君は果つるなかれ

宇土3年 中山 遥菜

【評】文語体で書かれた応募詩ははじめてです。わずか11行で、熊本地震後の荒涼風景を広げ広げています。作者の声の余韻が、今日もひしひしと叫んでいます。

「あの日の色 今の色」

あの日 私たちの街から「色」が消えた  
それまでの街には青く澄み渡った空

黄色や オレンジ 橙の暖かい灯 あかり

だけれどもあの日

空の「青」は「灰」に変わり

街の「黄色」と「橙」は「黒」に変わった

私たちの街に白い画用紙がかぶったように「色」が消えた

今はまだしっかりと色がついていないけれど

私たちの街に虹がかかるまで

私たちは画用紙に色をつけていく

濟々巒1年 山下 拓真

【評】「熊本地震」を描いた三枚の絵。それぞれの復興時間差を色分け塗りしてあります。応募作の三連の詩は、隅々まで全部、私たちの街、くまもと、なのです。さらに高校一年の詩は、「あの日」から「今へ」、そして「明日へ」。四連目の輝きを信じる熊本県民たちの未来を予感する永遠の詩篇のようです。

「自然の力」

どうしてだろう。悩み、分からなくなった時、なぜか外の景色、自然を見てしまう。分からずに進み、空、雲、小さく飛んでいる飛行機、草花、全部が唯一の癒しに見える。

一つ一つが命を持っていて、大きく育って、全てが不思議だ。きれいで美しいのに、どこか寂しく目と鼻に夏風がしみる。

「なんでこんなに、気持ちが悪くなるんだろう。」「どうして、生きている自然は人間にとって怖いものなのに、どう、こうやって優しくにもなれるんだろう。」

謎だ。だから怖い。でも、恐れるとは別の感情だ。この気持ちも、自分じゃなく、自然が与えてくれたもの。

「本当に、不思議だ。」不思議すぎて、考えていた事もいつの間にか飛んでいく。「だからすごい。」こういう感情もここから生まれる。

「自然って、人間にとって尊いものなんだ。」  
そういう風に私は思った。

球磨工業2年 甲斐 エリカ

【評】まるで書かされたような、希有なめぐり合いの詩篇です。自分を信じ、たった一人  
で歩く少女にしか感受できない運命の出逢いのようにも思えました。  
迷いのない作者のペン持つ時間をとっても大切に思います。

「たんぼぼ ハッピーバースデー」

春の日 みんなで帰り道  
道のたんぼぼ ふわふわの  
白い帽子をかぶってる

誰かがたんぼぼとつてきて  
私の前に差し出した  
「ろうそくがわりにふいてみて」  
そうだ 今日は誕生日

ふーっと大きくふいたなら  
白い帽子は飛んでいく  
お誕生日の歌にのせ  
青い空へと飛んでいく

ほら見てごらん 君たちが  
お誕生日を祝うたび  
大きな声で笑うたび  
白い帽子は喜ぶの  
大きく飛んで喜ぶの

飛べ飛べ帽子よ たんぼぼよ  
うんとうんと遠くまで

風に乗って旅をして  
どこかで花を咲かせたら  
白い帽子をかぶったら  
また誰かの誕生日  
お誕生日の歌にのせ  
青い空へと飛んでいけ

第一1年 川口 くるみ

【評】たんぼぼの白い綿毛を“ローソクの灯”にみたてた少女たちの詩です。  
青空経由でたんぼぼの野原を広げるメルヘンには、明るい笑顔のリズムで踊りたい  
気分ですね。

「におい」

この部屋は、えのぐとあぶらのおいがする。それから、ほこりと木のおい。

まん中のイスにすわる僕は大きな石のかたまりやら、どこかの空間やらを見つめながら、ずつと何かをつくっている。

そんな僕の手を、きびしい眼でみつめる先生。

先生もあぶらとえのぐの、においがするけど、それだけじゃない。

都会のにおいと、それから涼しい水のおい。

僕はー。

僕は、まだー。

あぶらえのぐと、あまつたるいお菓子のにおいしかない。

第二1年 大山 夏音

【評】〈へおい〉という感覚表現はいつも「郷愁」と重なります。〈水のおい〉〈都会のにおい〉など。先生からの学びの歳月と、静かな美術室と、日々の向上心と。作者の個性と。

言葉で書いた名画の雰囲気を放つ〈とても物音の少ない〉一篇です。

### ▽入選

吉澤綾葉（第一2年） 田中悠佳（尚綱2年） 大柿稔真（球磨工業2年） 徳重有咲（マリスト3年） 永田直美（尚綱2年）

### ▽努力賞

今別府隼人（第二1年） 土肥滉史（球磨工業2年） 西田和也（球磨工業2年）

【総評】どうしても書かずにはおられないような応募作品を相手に、晩夏の選者の心みたされた朝夕でした。

形のない思いを言葉という形にした高校生たちの詩の声には、「熊本地震」で失ったモノたちからのさまざまな希望の置きみやげをいただけたと思いました。

また、今年から投票権を持てるようになり政治参加が出来るようになった18歳たちの、自己評価の高まり、応募作品の内容の変化をしっかりと届けてくれました。

いつかは書くだろう、誰かが書くだろうと思いたい後回し精神をやめるきっかけの震災体験と政治参加と。高校生の笑顔から湧き出てくる文芸作品を大切にしたい。（丸山）

### 【肥後狂句部門】

#### ▽最優秀賞

僕も私も有権者 照れくさいけど父と行く

城北2年 長濱 幸夏

【評】この笠（題）に対して通常なら、有権者としての決意などを詠むところ。しかし、この句は自分自身の日常をサラッと詠み込んでいる。難しく考えず、肩の力を抜いているところがいい。

#### ▽優秀賞

がんばろう熊本「忘れる」でなく「バネ」にする

第二1年 山内 優奈



【評】 大変な震災だった。復興への道は険しい。しかし、状況を嘆くだけではダメ。復興をめざす前向きな気持ちがあふれている。

僕も私も有権者 大人になった証かな

第12年 岩本 美鈴

【評】 早く大人になりたいような、なりたくないような、気持ちが揺れ動く年頃。大人の仲間入りをちよっぴり喜ぶ気持ちが出ている。

実りの秋 おなかいっぱい旬の味

城北2年 関野 宇宙

【評】 秋は食べ物のおいしい季節。歓迎する気持ちが表れている。同時に、読書、運動、学びの季節でもある。これらも実りあるものにしてほしい。

がんばろう熊本 ピンチばってんチャンスばい

尚綱2年 土橋 奈々

【評】 ピンチはチャンスという。熊本地震の損失は大きい、ただ元通りに復旧するのではなく、従来以上の熊本に復興したい。

僕も私も有権者 どぎゃんかせなん一票で

玉名女子2年 板平 京佳

【評】 「どぎゃんかせなん」をキャッチフレーズにした政治家がいた。世の中が変わるかどうか、有権者は貴重な一票を、大事に行使してほしい。

## ▽入選

小山萌々子（玉名1年）石峰稜斗（球磨工2年）坂本菜々子（熊本西2年）野田さくら（玉名女子2年）一橋佑輔（球磨工2年）

## ▽努力賞

高橋直佑（マリスト2年）上妻七海（県立盲学校3年）堅島敢太郎（熊本3年）甲斐響歌（城北3年）松村千生（九州学院2年）

【総評】肥後狂句には、昨年より三百三十七点多い千百三十四点の応募をいただきました。狂句人口の減少、高齢化の中で、若い人たちが肥後狂句に関心を持っていただいたことは喜ばしい限りです。

字余り、字足らずの句もありましたが、上位の句にはセンスを感じさせるものも結構多くありました。われわれが日ごろ見落としているような発想のものとあり、ハツとさせられました。最優秀には、肩ひじ張らず、素直に自分の思いを表現している句を選びました。肥後狂句は自分の思いを、素直に表現するのが最も大事なことだと思います。

肥後狂句は、笠（題）に十二文字（十二音）で付け句するものです。七五調が基本です。笠を吟味して笠にまつわる情景、場面をイメージしてから、作句してください。今後も機会を見て、楽しく狂句づくりに取り組んでください。（野方）